

いよいよ私たちが目指してきた博物館が実現します！

理事長 天岸祥光

私たち NPO は長年にわたって「県立自然史博物館」の設立運動を精力的に行ってきましたが、いよいよそれが実を結ぶ運びとなりました（平成 26 年度県の当初整備事業費として 5 億 5,200 万円が計上されました）。

これまで、平成 25 年の会報 40 号（3 月）において、平成 25 年度に本格的な静岡南高への移転整備事業に着手する予算が計上され、設計と工事に入ることが決定されたことを報告し、41 号（6 月）においては、移転に伴う整備で、校舎全体（主に 1 階と 2 階）の整備計画の図面（県と NPO で検討したもの）を示し、42 号（9 月）においては、私たちが強く希望してきた外部有識者による「県立自然史博物館」の基本構想を検討する委員会が、川勝知事の意向も入れた形で平成 25 年 6 月に設置されたニュースを伝えました。43 号（12 月）では、この検討委員会での 4 回までの議論の様子をお伝えしました（この委員会は合計 6 回行われました）。

この基本構想検討委員会の委員長には、安田喜憲東北大学教授〔静岡県補佐官（学際担当）〕が選ばれ、委員長を含む 10 名の委員が構成メンバーとなりました。私たち NPO から、柴 正博理事と私（副委員長）が入りました。構成メンバーに私たち NPO が推薦した自然史博物館に造詣の深い 3 人が名を連ねたことも心強いかぎりでした。

全国的には静岡県は周回遅れであるという現状を認識しながら、委員会各メンバーの核心を捉えた、理想に燃えた提案がこれまで熱く議論されてきましたが、それが結集する形でまもなくまとめ、この会報が出るころには知事に提出されるはずです。それは私たち NPO が抱いてきた構想を凌駕するものになるだろうと私は確信しています。県側のこの博物館設置に向けての積極的な姿勢も大きな力になりました。4 月の NPO 総会では、皆さんにこの基本構想案を是非配布したいと考えています。

博物館の名称は、知事と委員長の思いを込めた「ふじのくに地球環境史ミュージアム」という、私たちが想像もしていなかった名前になる予定です。「自然」とか「自然史」といった文言が姿を消していることに違和感を覚える方も大勢いらっしゃると思います。私たち NPO の二人は最終的にこの名称に同意したわけですが、この名称の意味、内容についてはここでは説明しきれないので、4 月の総会において安田委員長に記念講演を行っていただく予定にしていますので、そこで委員長から思いの丈を語っていただこうと思っています。

博物館の学芸員は、大学教員クラスの研究者という位置づけで公募しますが、その分野を、①環境史、②地質・岩石・地震、③生命・昆虫、④生命・脊椎動物、⑤生命・植物、⑥生命・化石（古生物）に分類し、富士山世界文化遺産センター等との関係も重視した体制を取ろうとしていることが、なぜこの名称かのヒントになるかもしれません（今回は①、②、③分野の 3 名が取りあえず公募されました）。博物館の守備範囲を、自然環境とその影響を受けた人間の営みにまで広げたと解釈していただければ腑に落ちてくるのではないのでしょうか。

最後に最も重要なことを申し上げます。私たち NPO はその目的である「自然史博物館」ができれば解散するののかという問題です。結論は解散しません。それどころかこの静岡県の「自然史博物館」に、正に細胞のミトコンドリアのように、深く関与する存在として新たに蘇ることになりました。県側もこのことを強く希望していますし、私たちとしてももちろん異論のないところです。そのことは基本構想案にしっかりと謳われています。

従いまして、私たちは NPO の目的を新たにし、ますます邁進していきたいと思っていますので、これまでも増して皆様方のご支援をよろしくお願いいたします。